京都発

エコイベント アイデア BOOK

地蔵盆から祇園祭まで。
この一冊でエコイベントに。

めざせ！エコイベント
○京都市認定エコイベント登録でエコ化をPR！
○賢く使おう！「リユース食器」助成金制度

巻頭インタビュー
くるりのお二人に聞く「音博」で感じたこと

エコイベントの先駆者達

なるほど！疑問解決
エコイベント成功のための27のチェックポイント

京都市 応援します。あなたのエコイベント

京都のイベント、もっとエコに

観光のまち、学生のまちであり、地域の伝統行事が今も数多く受け継がれる京都。
日本三大祭の一つに数えられる祇園祭から観光行事、学園祭、地蔵盆や
地域のお祭りまで年間１万件を超えるイベントが催されています。
一方、たくさんの人が集まるイベントは短期間で大量のごみが発生し、
環境に大きな負荷を与えるものであるのも確か。
そこで、どうすれば一つひとつのイベントを「エコ」にできるか
皆さんと一緒に考えていきたいと思います。
イベントを企画・主催する人が、少しでも多く環境について考えること。
それはやがて参加者へ伝わり、京都からやがて世界へと
エコ意識が広まっていくことにつながるのではないでしょうか。

DO YOU KYOTO?

CONTENTS

目　次

01　京都のイベント、もっとエコに

03　巻頭インタビュー くるり＆京都女子大学
くるりのお二人に聞く。「音博」で感じたこと。

09　エコイベントの先駆者たち
美しい祇園祭をつくる会、
同志社京田辺祭2009実行委員会、
京都女子大学「SHIBARIWA」、京都サンガF.C.、
特定非営利活動法人「環境市民」

19　イベントをエコにしてみよう!
ステップ01　企画・準備
・エコイベント成功のための27のチェックポイント ……20
・「京都市認定エコイベント」への登録 ……25
・「リユース食器」助成金制度 ……26
ステップ02　実施・運営
・イベント会場「ごみ減量大作戦!!」 ……27
・「ごみステーション」をつくろう! ……29
ステップ03　検証・まとめ
・成果を次へ活かすために ……30

巻頭インタビュー

くるりのお二人に聞く。「音博」で感じたこと。

京都出身のミュージシャン「くるり」。
そのメジャーデビュー10周年を記念してはじまった「京都音楽博覧会」。
出演はもちろん、直接プロデュースもされているお二人に、
京都女子大学の学生さんがその経験で感じたことをお聞きしました。

くるり／岸田 繁さん（後列）：vocal.guitar・佐藤征史さん（前列右）：bass
インタビュアー／巽 麗衣さん（前列左）・八田和子さん（前列中）：京都女子大学

くるり Profile

1996年に立命館大学にて結成。1998年メジャーデビュー。「みやこ音楽祭」「京都音楽博覧会」など地元・京都での音楽イベントにも力を入れている。

京都音楽博覧会（梅小路公園）

京都で誰もやってない イベントをやりたかった

京女：くるりさんは2007年から野外音楽フェスティバル「京都音楽博覧会（以下、音博（おんぱく））」を主催してらっしゃいますが、始められたきっかけは？

岸田：そうメジャーデビュー10周年。京都で組んだバンドですから京都で何かやりたいと考えていて、どうせやったら誰もやってない場所で、誰もやってないことをやろう、という話から梅小路公園で野外フェスをやらしてもらうことになりました。最初はその年だけと思ってたんですが、そのあとも続けさせてもらってます。

京女：2010年で4回目ですね。

岸田：1年目のライブで、お客さんから「来年もやって！」って言われたんです。それでステージ上で「次もやるぞ！」と約束してしまった（笑）。

佐藤：音博のステージは他の野外フェスと違って夜ではなく昼間、芝生の上でやります。ちょうど自分たちの出番の時が夕暮れで。ライトを浴びるとみんなの顔だけが一杯浮かんで見えるんです。

京女：それは素敵ですね。

佐藤：みんな、すごくいい顔になるんですよ。

自分たちが主催するライブでこんなことを言うと自己満足と言われるかもしれないけど、その顔をステージ上で感じられるというのはかなり大きな喜びで。すごく幸せなイベントやと思うんです。実際には大変なことも多いんですけど、自分たちもいろんなジャンルや海外のミュージシャンの方と触れ合えてライブも見られるので、できることなら続けたいと思いますね。

知恵を出し合えば ムダはなくせる

京女:野外音楽フェスと言えば、終わったあとはごみの山…というイメージが強いんですが、それが音博では、分別用のごみ袋を配ったり、リユース食器を使ったりと、エコ化に積極的ですね。

岸田:エコという言葉自体、今は形骸化されてるところもあって、「環境にいいことしてる」とか「これはエコですね」とか言うことが自分にとってどういうことなのか。まずは「知ること」が大事やと思うんです。まあ、一番のエコは音博をやらないことなんですが。

京女:そんな!(笑)

岸田:やらなければごみも出ないし。でもそんなこと言ってたら何もできなくなる。知恵を出し合って、どうやってムダをなくすか。お金をかけない、処理に手間がかからないイベントのやり方とか。その方法をまずは考えなくてはいけない。音博では、始めた当初からリユース食器や、ごみの分別に取り組んでらっしゃる団体の方に参加してもらっています。

京女:知って考えることが大事なんですね。

岸田:もちろん僕たちも完璧にできてるとは思ってないです。皆さんは環境を専攻されてる学生さんなんでご存じだと思うんですが、

マイ箸ってあるじゃないですか。割り箸をやめてマイ箸を使えば環境にやさしいってみんな思ってる。僕も買ってみたりしたけど。でもちょうど去年の夏の終わりごろ、京都に帰ってきたら山が赤かったんですよ。地元の人に「えらい今年は紅葉が早いですね」って聞いたら「あれは虫ですやん」って。

京女:ナラ枯れですね。

岸田:山の持ち主が林業をやめてしまって、手入れがされていない。その話を聞いてよくよく考えたら、割り箸がもったいないからといってマイ箸を使えば、日本で林業が衰退して結果、山が放っとかれて虫がわく。極端に言うとエコが産業の衰退につながるかもしれへん。もちろん、そんな単純なことではないけど。ただそう考えたら、マイ箸と割り箸、いったいどっちがええことなんやろって考えてしまう。

京女:わが校でも間伐材を使った国産割り箸を普及させようと起業したグループがあるんです(詳細は13ページ)。マイ箸も割り箸もそれぞれ利点があって何が正解か難しいですね。よくよく考えないと。

佐藤:いろんな方法が一杯あっていいと思う。結果的にムダをなくすことだと思うんです。もったいないという感覚があれば、普通にできることもあるから。

考えるきっかけを持って帰ってもらう

岸田:最近いろんな音楽フェスがあって、“フェスバブル“って言われてますが、フェスはだいぶ昔からあるもので、60年代のアメリカのウッドストックとかではいろんなミュージシャンが集まって、音楽を通じて自由や高揚感を感じたり、新しい価値観を持ったりした。もちろんその頃は環境問題やエコなんて概念は一切ないけど、やっぱり僕らロック好きからすると美しいもんとして語られている。今は僕らみたいなロックバンドがイベントをやると、絶対環境に取り組むとかエコとか枕詞をつけなあかんみたいなところもあるんですけど、それは僕はカッコ悪いと思ってるんです。そんなことは個人個人が取り組むことですから。

京女:参加する側も、エコ活動をしに行くんじゃなく、音楽を聴きに行くのですものね。

岸田:来てくれた人、やらせてもらっている土地に対して、モノとかお金とかじゃない、いい価値観とか、楽しかったなぁという気持ちとか、そういう目に見えへんものをちゃんと持ち帰ってもらうことが大事。そういう思いのあるイベントは、自然とみんなにごみをばら撒かせない。道理が通ってへんイベントではダメなんです。

佐藤:たとえば山に登ると「ごみは持って帰ろう」って自然に思うじゃないですか。普段はせえへんけど、すれ違うおばちゃんに「こ

んにちは」って挨拶したりとか。その場に行ったら「そうせなあかん」空気がある。

京女：音博の会場でごみが散らかっていないのは、そういう空気感があるからですね。音楽を聴きに来た人が、たまたま会場でリユース食器という方法があったのかと知って、一つでも考えるきっかけを持って帰ってもらう。大がかりなことでなく、すっと身近に入ってくるようなものがいいんですよね。

岸田：だから、音博というイベントで何ができるのか分からへんけれども、自分たちが音楽をやって伝えるメッセージの一つには、それぞれが「深く考えよう」ということがあると思うんです。音博もそれを推進する一つであればいいかと思ってる。

長く続いていることに知恵とヒントがある

岸田：音博の会場が芝生敷きなんですが、土のあるところはやっぱり自分が「生き物」な感じがすると思うんですよ。ちょっとやらかい気持ちになる。

京女：京都ならではの雰囲気というのもあるんでしょうか。

岸田：ありますね、それは。京都に帰って来るといつも思うんですが、建物の高さが低いでしょ。これは相当頭がいいなと思います。住んでる人も多いし、僕が不動産屋やったら高いマンション建てたいし、こんなもったいない土地の使い方はない。でも朝起きて山が見える。京都にいてたときは分からへんかったけど、実際東京に住んでると圧迫される感じがあるんですね。大都市なら京都がホッとする。エコと直接つながらないかもしれへんけど、まちの作り方とかを深く考えていくとヒントがたくさんあるのかな、と思うんです。

京女：そうかもしれないですね。

佐藤：昔から続いてるものって、自然に沿って形ができて、今まで続いてるじゃないですか。これって意外と理にかなってたりするこ

とが多くて、昔の人の知恵じゃないですけど、実は自然のルールを分かってたりするんやと思うんです。

岸田:昔のおばあちゃんの知恵ってあるでしょう。野菜が腐らへんようにお漬けもんにしようとか。そういう長く続いてることに、結局ヒントがあるんとちゃうかな、と最近思うんですよね。

京女:昔から続いてることというのは、意味があって、そこから得られる知恵がある。

岸田:何も「エコや!」と思ってお漬けもん漬けてるわけじゃないけど(笑)。

京女:当たり前だったことを見直してみて、考えるきっかけ、深く知るきっかけになればいいですよね。お話を伺って、音博を観に行くのが楽しみになりました。

岸田:いや、正直まったく儲からないイベントなんですが…。

京女:ぜひ続けてください。

佐藤:がんばります。

京女:9月を楽しみにしています。本日は本当にありがとうございました。

紹介します

インタビューに協力いただいた京都女子大学・蒲生ゼミの皆さん

蒲生先生を囲むゼミの皆さん

手作りのリサイクル工作品(キャップ回収容器、エコバッグ等)

くるりさんへのインタビューに協力いただいたのは、京都女子大学・蒲生ゼミのお二人。質問はゼミのみんなで一緒に相談して作成してくれました。環境が専門の蒲生先生の下、地域のふれあいまつりでリユース食器のボランティアをしたり、小学生にリサイクル工作を指導したりと、教室を飛び出したフィールドワークをモットーとする行動派のゼミです。

◎インタビューを終えて

じっくり考え、丁寧に応えてくださったのが印象的でした。有名なミュージシャンの方が身近なところからエコを取り入れて、何かを考える「きっかけ」を広くつくってくださることが、とても心強いと感じました。

協力/京都女子大学 蒲生ゼミ (上左から)滝川賀奈子さん、多田しおりさん、蒲生先生、竹村沙央里さん、中村 愛さん、眞岸寛子さん (下左から)巽 麗衣さん、八田和子さん、飛坂 舞さん、吉田江里さん

01 エコイベントの先駆者たち

情けない。鉾町はごみ箱とちゃいます。

ごみを減らし、リサイクルを進めること。
日常生活でできても、不特定多数が訪れる
イベントで周知徹底するためのコツとは？

Profile

美しい祇園祭をつくる会
代表代理
松井 恵さん

環境保全を考える「京都環境アクションネットワーク」代表を務め、2006年に「美しい祇園祭をつくる会」を結成。祭りのごみ問題に取り組む。

山鉾の町に現れる もう一つの「山」

「祇園祭をなんとかせなあかん」。松井恵さんがそう思ったのは2005年の宵山のこと。中京区壬生に生まれ、祇園祭は幼い頃から夏の一番の楽しみでしたが、夫の転勤で長く京都を離れ、帰京後も子育てや仕事に追われる中で足が遠のいていました。そんな頃、海外からのお客様のガイド役として何年か振りで宵山を訪れたのでした。

鉾町へ足を踏み入れて驚いたのは、足元に散乱する大量の使い捨て皿や割り箸、ペットボトルにビール缶。鉾町や露天商の人たちがごみ箱を設けてはいますが、入り切らないごみが山のようにあふれかえり、もはやどこが回収場所かも

分からない始末。おまけに細い路地や物陰からはアンモニア臭まで漂ってくる有様です。

ボランティアスタッフが分別をナビゲート

適正な分別のために まずごみを知る

「動く美術館とまで言われる祭りなのに、お客様に顔向けできないほど恥ずかしくて…」。ごみは分別もされず、袋から竹串が飛び出すなど危険を感じた松井さんは、その場で来年に向けて行動を起こすことを決意しました。

長年、環境保全を考えるグループで一緒に活動している仲間を招集。まず2006年は調査からスタートしました。山鉾連合会の許可を得て宵山の3日間で回収したごみを一つずつ、それこそ針金一本まで仕分けし、ごみの種類と量を分析。その結果に合わせて分別しやすいよう、色分けしたごみ箱を作ることを提案しました。

ごみ箱を設置するだけでなく、その場にスタッフが常駐して分別を案内。箱が一杯になる前にごみ袋を交換することで散乱も減りました。「誰かが歩道に置いた空き缶が目印となってごみの山ができる。最初の一つを捨てさせないことが大切」とパトロールも強化しています。40人だったボランティアスタッフも今では400人を超え、活動も知られるようになりました。

「ユネスコの世界遺産にも登録された祇園祭。いつまでも京都人の自慢であってほしい」。松井さんたちの活動は続きます。

宵山の鉾町を歩いて散乱ごみをパトロール

■コラム
「割り箸」だってリサイクルできる！

模擬店や屋台から出る大量のごみ。ごちゃまぜのまま回収すれば焼却処理するしかありませんが、分別すればまだまだ使えるものだってあるはず。例えば割り箸。大手製紙会社の中には、割り箸を回収して紙の原料にリサイクルしているところもあります。イベントで使い終わった割り箸を集めて、これらの製紙会社に送ると、また資源として生まれ変わるのです。使用済みの割り箸を集める際に、「鉛筆立て」のような回収用の筒を用意しておけば、束にしたり、その後、乾燥させたりする手間も省けるというもの。リサイクルの輪を広げるほんの少しの工夫です。

使い終わったてんぷら油がステージを照らす

ロックバンドの演奏に、お笑いステージ、のど自慢コンテストなど、ステージプログラムはイベントの華。その舞台を照らすライトを全てバイオディーゼル燃料で発電しようという試みが行われたのは、同志社大学京田辺キャンパス。2009年の「同志社京田辺祭」実行委員会で環境チームを担当した高山俊一さんは「予想以上に大変でしたが、やりがいのある取組だった」と振り返ります。

生物由来原料から作られるバイオディーゼル燃料（BDF）。毎年、このイベントの中で環境問題に取り組んできた同志社大学では、2007年にもバイオ燃料で発電を行いましたが、この時は発

使った油も捨てたもんじゃない。

02 エコイベントの先駆者たち

省エネルギーに、省資源。個人では心掛けているけれど、イベント会場では何ができるのか？新しいエネルギーに着目するのもアイデアです。

Profile

同志社大学
「同志社京田辺祭2009」
実行委員会の皆さん

京田辺キャンパスで行われる同志社京田辺祭。2009年実行委員会で環境を担当した高山俊一さん（右）、井上誠さん（左）、岡本昌子さん（中）。

電機と共に燃料も専門業者から購入しての実施でした。そこで高山さんたちは「せっかくなら原料の回収から挑戦してみよう」と考え、家庭から出る使用済てんぷら油の提供を市民に呼び掛けたのです。

2カ月かけた回収作業は「エコ啓発作業」だった

回収の目標に掲げたのは200ℓ。一般家庭から出るてんぷら油は1回につき数百mℓですから、自炊もあまりしない学生の間だけで集めて賄える量ではありません。イベント当日までの2カ月弱。メンバーは、まず地元市民に呼び掛けるところからスタートしました。

チラシを役場に掲示するだけでなく、回覧板で

ステージ照明の電力は全て使用済てんぷら油で発電

当日の会場でも使った油の回収を行った

まわしてもらったり、ポスティングに回ったり、地域のイベント会場へ出かけて行って回収ブースを設け、集めた油と景品を交換しました。もちろん大学周辺のお宅を一軒ずつお願いに回ることもしたと言います。大学の食堂から出る揚げ油と合わせて当日までに集まったのは目標を大きく超える250ℓ。それらは専門業者に委託して精製され、無事2日間、ステージを照らし続けることができました。

「最初は発電が目的でしたが、回収のために一人ずつ説明して歩き、環境への取組について理解してもらったことにこそ、大きな成果があったように思います」と高山さん。

てんぷら油も、人と人との関わりも、まだまだ捨てたもんじゃないようですね。

■コラム

「ペットボトルキャップ」で燃料を。

イベントやお祭りの会場で大量に出るごみの一つがペットボトル。分別回収でリサイクルにまわすことは定着しつつありますが、もう一つ処理に困るのが「ボトルキャップ」。最近では個別に回収するボックスを見かけるようになりましたが、これを回収し、油化して再利用する方法があるのをご存じですか?

専用の装置を使えば、ボトルキャップからリサイクル燃料を抽出することができ、それで発電して文化祭を行った学校もあります。「もったいない」という気持ちはアイデアの種なのかもしれません。

わりばし一膳の革命。

03 エコイベントの先駆者たち

大量の物品が配られ、消費されるイベント会場。主催者として何を選べばいいのか、ほんの少しの問題意識の中にヒントがありそうです。

Profile

京都女子大学
SHIBARIWA の皆さん

2009年に10人の学生が学内企業としてスタート。林業と山林の再生を目的に国産割り箸の販売を手掛ける。高桑進教授(中)、渥美志織さん(左)、宮田真優加さん(右)。

割り箸はエコの天敵!? いいえ、里山の救世主です

イベントのお楽しみの一つといえば飲食ブース。あちこちの屋台をのぞくのは祭りや催し物ならではの醍醐味です。ただ問題なのは大量に出る紙皿に紙コップ、そして何百、何千膳という割り箸の束…。イベントのエコ化を考えるうえでリユース食器の活用やマイ食器、マイ箸の持参を呼び掛ける主催者が増える中、一方で「ぜひ割り箸を積極的に使ってください!」と呼び掛ける学生たちがいます。

使い捨ての割り箸は森林環境の“天敵”と思われ勝ちですが、「それは大きな誤解」と話す京

都女子大学の学内企業「SHIBARIWA（シバリワ）」の皆さん。現在、流通数の大半を占めている中国製の割り箸ではなく、国産の「間伐材」を活用すれば、国内の林業を再生することができ、荒れはじめている日本の森林を救うことになると言うのです。

学内企業「SHIBARIWA」のメンバー

安価な輸入品に勝つために広告営業へ東奔西走

起業のきっかけとなったのは里山の環境を学ぶ高桑進教授の講義でした。国産材の価格低迷で、全国の山林で切り捨て間伐が増えています。そこで考え出された間伐を支援するシステムが『割り箸一膳の革命』です。安全で安心できる国産の割り箸の価格は、中国産に比べ約3倍。とても

広告を掲載した箸袋たち

そのままでは太刀打ちできません。

そこで大阪のベンチャー企業と共同で「箸袋」に広告を掲載し、中国産と変わらない価格を実現するビジネスモデルを開発。「食卓エンタ」と命名された商品は現在、学食や飲食チェーン店、イベント会場などに卸されています。

メンバーの渥美志織さんは「広告のスポンサー探しが一番大変ですが、一軒ずつ説明し、思いを理解してもらうことはやりがいがある」と言います。「回収した割り箸を活用するため、山で炭焼き実習も行っているんですよ」とは宮田真優加さん。環境に、林業に、企業に、使う人にと、それぞれの意識を少しずつ変えていくこの取組。一膳の割り箸から始まる革命が、今広がりつつあります。

■コラム
ついてますか？環境ラベル

会場で配布する記念品や使用する物品。エコマークやグリーンマークがついていますか？近年ではバイオマス（生物由来原料）マークや牛乳パック再利用マークなど、様々な商品・サービスがあります。ぜひ優先的に利用してみてください。

エコマーク：環境への負荷が少なく、環境保全に役立つと認められた商品

グリーンマーク：古紙配合率40%以上の紙製品

間伐材マーク：間伐材を使用した製品

グリーン・エネルギーマーク：製造等にグリーン電力が使用されている製品

「DO YOU KYOTO?」サンガプロジェクト始動!!

京都議定書の誕生の後、世界中で交わされるようになった合言葉「DO YOU KYOTO?」。「環境にいいことしてますか?」の問いかけは京都のまちにずいぶん浸透してきました。

そんな中、京都のJリーグクラブである京都サンガF.C.は、2009年9月にこのプロジェクトの大使に就任。地元に愛され、子どもたちのあこがれの的であるチームが一丸となって環境問題に取り組んでいます。

中でも注目したいのが西京極で行われるホームゲーム。毎回1万人近くの観客が訪れますが、環境への負荷を少なくするため、市バス・地下鉄の利用を積極的に呼び掛けています。ポスター

04 エコイベントの先駆者たち

行きも帰りもエコで行こう。

環境に負荷をかける自動車の排ガス。
たくさんの人がやってくるイベントだからこそ
来場者には公共交通を利用してほしい。

Profile

株式会社京都パープルサンガ
社長
今井浩志さん

1922年に創設された京都紫光クラブを前身とするプロサッカーチーム「京都サンガF.C.」。専務取締役を経て2010年1月より現職。